

# 「家の光」に見る農業用機械の発展と考察

食料環境経済学科 2 回 森野寛史

比較農史分野では、雑誌「家の光」を題材に各々が興味を持った分野で調査に取り組んだ。「家の光」は 1925 年より農協を通じて販売されている月刊誌であり、“農業・農村文化の向上”がこの雑誌の根底を流れる普遍的な主題である。栽培技術、農家の現状などは勿論のこと、ファッション、健康法、連載小説に至るまで内容は多岐に渡る。その中でも広告は限られたスペースに企業の主張が集約されている、非常に洗練された媒体である。私はこの度農業用機械の広告に注目した。大正、昭和、平成の 3 つの時代を潜り抜けてきたこの雑誌の歴史を切り口に、広告から見る時代の変遷を追ってゆきたい。

大正～戦後期[ 資料 no.1]

この時期には農業用機械の広告は殆んど見られない。戦前は大戦の動向を伝える記事、農民たちを鼓舞する記事が大半を占めており、戦後暫くも如何に復興を遂げるかに焦点を当てた記事が多い。やがて農機の広告は徐々に増加するがそれでも絶対数は少なく、裏表紙や見開き等の主要な位置に登場することは稀である。これは偏に需要がまだ少なかったことの表れであり、農家に経済的余裕が無かったと考えられる。だが農機のメリットを検証する記事はある程度見られるようになっている。

具体的に興味深い例として、昭和 26 年（1951 年）3 月号に掲載された鍬（くわ）の広告を挙げる[ 資料 no.1 上]。耕耘機など無いこの時代の耕耘が大変な重労働であったことが窺える。ちなみに壱千円という価格は現代の約 3 万円に相当する。また耕耘能率一日二反歩（たんぷ）以上とあるが、一反歩は 300 坪である。

また、昭和 27 年 9 月号では、裏表紙に初めて農機が登場する。

昭和 30 年（1955 年）[ 資料 no.1,2,3]

数年前まで殆んど見られなかった農機の広告が多くみられるようになっている。まだまだ紙面の 4 分の 1 程の小規模の広告が多いが、それでも戦後 5 年の復興の目覚しさを物語っているように思う。以下は本年の広告をまとめた表である。今日も業界をリードしている企業から、今は無くなってしまった企業、事業転換して成功した企業など様々であり興味深い。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1 ヤマサ式自動耕耘機												
2 ケーオ号												
3 ヤンマーK型耕耘機												
4 クボタ耕耘機												
5 旭産業 全自動脱穀機 籾摺機												
6 イセキ 脱穀機 耕耘機 籾摺機												
7 マルヨ式脱穀機												
8 アキツ耕耘機												
9 小池式脱穀機												
10 藤井式脱穀機												
11 今間式無排塵脱穀機												
12 クボタ(企業として)												
13 水力国宝(東京電機)												
14 共立の撒粉機												
15 シバタの農機具												
16 能登式自動爆音機												
17 アキツ万能無故障耕耘機												
18 日の出式総自動籾摺機												
19 東神商事「稲刈機」												
20 丸宮式動力脱穀機												
21 サトー式自動耕耘機												
22 三菱ハンドトラクター												
24 アキツ小型耕耘機												

- 1 “実演歓迎”は耕耘機の普及率の低さの表れではないか。
- 3 どの時代にも通じることだが、女性が運転する写真が多い。操作の簡便性を示すため。
- 11 無排塵は日本で唯一？
- 12 トップブランドであるクボタ
- 16 後にも先にもこの月だけであった。
- 19 恐らくこれが初めての稲刈機広告。3900円。「1台で8人分の能率」
- 24 小型化は日本の特色

- ・ 2月号 P176「静岡県菊川町に内田農協を訪ねて」では小型自動耕耘機導入に関する記事が掲載された。国内製品は27.8万円、実働は最大でも200時間でこれでは役牛よりも不経済であったため、米国産の8万5千円の耕耘機を日本用に改造したという内容であった。当時の実情をよく表している。
- ・ 3月号 「動力耕耘機の上手な使い方と手入れ」の記事
- ・ 4月号 P182 座談会「動力耕耘機を使った体験」  
この頃は共同利用が盛んであり、ある人の地域では13戸の農家で2台の耕耘機を使っていた。また“新しい機械の無い農家には若い人が作男に来てくれない”“馬の死をきっかけに耕耘機を購入”といった興味深い意見も。
- ・ 7月号 P74 記事「協同の花ひらく緑の平野」 山形県酒田市に於ける動力耕耘機の普及率は、農家488戸に対して160台であった。

昭和36年(1961年)[資料 no4,5]

	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1 義士号自動脱穀機											
2 アキツハントラ											
3 ホーネンス ロータリートラクタ											
4 トヨタ万能耕運機											
5 竹下耕運機											
6 三菱耕うん機											
7 ロビントラクター											
8 イセキ(企業全体)											
9 サトー式クミアイ耕運機											
10 富士耕耘機											
11 今間式全自動脱穀機											
12 スピーキトH型小型耕運機											
13 大竹式脱穀機											
14 ダイキン農機具											
15 日ノ本ミニチュア四輪トラクター											
16 スクリュートラクター											
17 クボタ耕うん機											
18 大島耕耘機・糶摺機											
19 ケーオ号ホームスレッシャー											
20 協和耕運機											
21 スズエ耕うん機											
22 シバタ式吸引型自動脱穀機											
23 ヤンマー(企業全体)											
24 三恵耕耘機											
25 シバウラホイールトラクター											
26 イリノ式携帯用刈取機											
27 三菱ティラー											
28 ロビンティラー											
29 共立パワーカルチ											
30 マメトラ耕運機											
31 オレゴン農機											
32 アキツ直播機											
33 イセキティラー											
34 スピー 糶摺機											

- 3 以前はあまり見られなかったトラクターの登場“あらゆる牽引作業”また11月号より機種が増える。
- 6 3月号より汎用型と超能率型に分かれる。一社から用途に応じて複数の機種が出るのはこの当時まだ珍しい。耕運機産業が新たな段階に達したと言えるのではないか。
- 8 2月号でカラー広告を出していたのはここだけだった。別の月には“アベックで東京へご招待！”というキャンペーンも行っている。イセキの製品を購入した人中から年二回合計400組を東京に招待するというなかなかの内容である。
- 10 “あぜぎわ耕運に新威力！”日本の狭く不規則な形の農地ならではのセールスポイントである。先に安い米国産の耕運機を輸入して改造するという事例を挙げたが、それも日本の狭い農地に適応出来なかったからである。

- 15 “小回り重視”やはりここでも日本の特徴が
- 17 日本初のセルスタート
- 24 三菱に続いて軽量強力型、強力万能型、高級深耕型に分かれる。
- 26 まだまだ珍しい刈取機の広告であるが、早くも携帯型が登場した。能率は人力の6倍。
- 27 以前は見られなかったティラー（耕運機に荷台をけん引する機能を持たせた物）が登場する。“1台で4種の農作業”  
また9月号では三菱としては初のカラー広告が掲載される。
- 30 はじめから小型に特化してセールスポイントにしている。
- 31 各企業が小型化を推進する中で唯一“米国水準の酪農用具”を売りにしている。広告からだけではアメリカの農機を輸入しているのか、アメリカ仕様なのかは判断できない。現在も横浜にオレゴン農機という企業は存在する模様だが詳細は不明。
- 32 “田植えをしない米作り”がセールスポイントの直播機。画期的であり後の時代にも何度か登場するが、デメリットも多く定着には至らなかった模様。

6年前と比較して全体的に1つ1つの広告が大きくなり、種類も増えた。これほど多種多様になったことから普及率も相当向上したのではと考えられる。6年前はただただ「能率がすごい」「賞受賞」等の謳い文句に留まっていたのに対して、機能が充実して具体的なセールスポイントが挙げられるようになった。一方で耕運機の発展系であるティラーや、全く別の種に分類されるトラクターの広告が登場し、脱穀機が自動化されている。またクボタやイセキ等の現在も業界で高いシェアを誇る企業はこの頃から他社をリードしている印象を受けた。

～用語～

#### 耕耘機

専ら田畑を耕すためだけに使われる。それ以外の機能はもたない。

#### トラクター

本来の意味は牽引車であるが、“農業用トラクター”は耕起、および各種の作業用の農業機械、またはトレーラーを引くために使用される機械のことを指す。

#### 脱穀機

その名の通り脱穀をする機械で、自動脱穀機はこぎ胴を動力で回転させ、稲・麦の束を安全にこぎ胴に送り込む搬送機構、唐箕の送風によりわら屑等と籾を選別し、籾だけを取り出す機構を備えた脱穀機である。

昭和43年(1968年)[資料 no6,7,8]

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
1 ヤンマーディーゼル耕うん機											
2 ヤンマーディーゼルトラクタ											
3 ヤンマー富士耕うん機											
4 ヤンマー収穫作業機											
5 日の本四輪トラクター(乗用)											
6 コンマ自走式脱穀機(ハーベス)											
7 ノダディーゼル耕うん機											
8 ノダディーゼル自動脱穀機											
9 三菱耕うん機											
10 三菱農用トラクター											
11 三菱ミニロータ											
12 三菱バインダー											
13 三菱ミニコンバイン											
14 三菱コンバイン											
15 ロビン農業機械											
16 富士小松ロビン株式会社											
17 イセキ農機											
18 ホンダ耕うん機											
19 ホンダ管理専用機											
20 ホンダティラー											
21 共立背負動力防除機											
22 ホーネンス耕うん機											
23 ホーネンス ハンマーナイフモア/トレンティガ-											
24 クボタトラクタ 他											
25 クボタ耕うん機 + テーラー											
26 クボタバインダー											
27 サトー乗用トラクター											
28 サトー耕うん機											
29 サトー収穫調整機シリーズ											
30 カンリウ田植機											
31 ビーバー稲草刈機											
32 シバタ直播機・中耕除草機											
33 マメトラ耕耘機											
34 マメトラ田植機											
35 マメトラ畦立ロータリー											
36 マメトラ刈取機											
37 シバウラ乗用耕耘機 + トラクタ											
38 スズエバインダー											
39 スズエ耕運機											
40 ケーオ号自動脱穀機 + バインダー											
41 大島バインダー + 籾摺機(6月~)											
42 みのる二条直播機											
43 みのる動力刈取機											
44 落合式EOP茶摘機											
45 スピー異型型籾摺機											

5 農村の人口は減る一方のこの頃、歩行型ではもう追いつかない

16 この年2月より合併

17 省力稲作 一貫機械化体系 田植機 10 アールあたり 1 時間

42 “ 田植をやめよう ”

- ・ 1月号巻頭特集「アメリカの大経営農家」  
海外農業の実態はこれまでも幾度となく取り上げられてきた題材である。日本の農村青年を向かえて世話をしている。
- ・ 1月号記事「新天地八郎潟にかける」  
直接農機に関係のある記事ではないが、10 ページ以上にまたがって特集されていることから八郎潟への注目度の高さが窺える。

先ほどから7年後の昭和43年(1968年)であるが、17イセキ農機の広告のように、大手企業の殆んどがそろって一貫機械化を強調している。数はそれほど多くないものの田植機、コンバインが新たに登場したことで耕耘作業から田植、収穫、脱穀までの一連の流れ全ての機械化が達成されたのである。これは我が国の農業史に於いて大きな意味を持つと思われる。だがコンバインが発売されているのはクボタと三菱の2社からのみであり、同じく大手のヤンマー製品では刈取機と自動脱穀機に分かれているため[資料 no.6 左上]コンバインの普及はまだまだ進んでいなかったと考えられる。またトラクターの広告が以前より増加し、耕耘機との割合は5分5分程度になった。この年は同じ企業をかためて集計したが、耕耘系の農機は冬から春に、収穫系の農機は夏から秋に広告が掲載されるという傾向が緩やかではあるが見られた。

~用語~

バインダー

主に米や麦の収穫作業で使用される農業機械の1つである。登熟期を迎えた作物の刈り取りと結束を同時に行うことができる。

コンバイン

稲や麦を刈り取りながら脱穀する機能を備えた農業機械である。

昭和49年(1974年)[資料 no.9,10]

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1												
2												
3												
4												
5												
6												
7												
8												
9												
10												
11												
12												
13												
14												
15												
16												
17												
18												
19												
20												
21												
22												
23												
24												
25												
26												
27												
28												
29												
30												
31												
32												
33												
34												
35												
36												
37												
38												
39												
40												
41												

- 1 やはり女性の運転、10 アールあたり 45 分。歩行型である。
- 2 耕運機 “ わずか 39 キロ ! ” 小型が売り
- 6 10 アールあたり 60 分
- 11 10 アールあたり 60 ~ 90 分
- 12 トレンチャー農法を推奨。日本語では自動溝掘機と表記されている。写真から判断する限りでは、農作物によって掘り方の違う機械を使い分けることのように思える。
- 13 12 と同じ。“ ゴボウ、長いも、天地返し等を使い分ける ” と書かれている。
- 14、17、36 クボタ等大手メーカーに製造を委託して全農ブランドを立ち上げた。セール

スポイントはアフターサービスを充実させ一方的なモデルチェンジを防ぐ点。

17 “時代の要求にパワーで応える”

“トラクターは機械です。数字がその実力を正直に語ります。数字で選びましょう。”

20 ばら撒き苗。

21 “無駄にしない 一粒の実りも 一滴の燃料も”

“燃料報国”

“一滴の燃料生かす確かな技術”

いずれも石油危機の世相をよく反映している。

22 トラクターの種類は 11 馬力～100 馬力の 27 機種にまで増えている。

“多角化農業にクボタ”

“常識破りの 4 輪駆動、歩み版無しであげ越え”

29 “このタイプで 4 つ目の秋をくぐります。”

38、39 ペーパーポット田植機。寒冷地農業に驚異的な収穫をもたらしたと書かれている。

が現在は稲作では殆ど用いられていない技術である。また空飛ぶ～とは空中田植と呼ばれている方法で、苗を投げた際の落ちる力を利用して田植を行うらしい。こちらでも現在は廃れている。

高度経済成長期を乗り越え田植機、バインダー、コンバイン等が更に普及している。以前は広告の大部分を占めていた耕運機はトラクターに取って代われ、“もう歩かなくてすむ！”“乗る農業の時代”といったコピーが目立つ。また耕運機も完全に衰退したわけではなく、小規模農業の為の機械として存続していくことになる。クボタ耕運機の“小規模の田畑が 6 割の日本では耕運機の手軽さが必要”という広告が実情をよく表している。対してトラクターの広告はパワーをアピールするものが多く、田植機はまだ歩行型である。目新しいものとしてはトレンチャーが挙げられ、作物により機械を使い分ける手法はその後も受け継がれていったもようである。田植に関しては次々と新たな手法が考案されるのが興味深い。そしてこの年を象徴する広告はなんとと言ってもヤンマーディーゼルの広告である。“燃料報国”という戦時中を思わせるかのような標語から石油危機の緊張感がひしひしと伝わってき、白抜きの“無駄にしない 一粒の実りも 一滴の燃料も”の文字はセンセーショナルである。



## 総括

終戦から 10 年、高度経済成長前、経済成長の最中、経済成長後のオイルショック期というキーになると思われる 4 つの年に絞ってとりあげてきたが、農機の発展の大まかな流れをつかむことが出来たように思う。戦後まず初めに登場したのは耕耘機で、順調に普及した後トラクターの台頭とともにその広告数は減少していったが、やがて大規模農業にはトラクター、小規模農業には耕耘機という住み分けが確立された。刈取りや脱穀の作業は 1950 年代半ばには自動化が完了し、それらの作業が統合されたコンバインが発売されたが、バインダー等の広告は無くならなかったことからやはり小規模農業の場で使用され続けていると考えられる。田植機の広告も昭和 43 年（1968 年）には数多く存在したためこの頃普及が進んだと考えられるが、直播などの田植を省力化するための工夫がどの時代にも為され、そして悉く失敗に終わっていることが興味深かった。全体としては性能を向上させ乗用化させつつも小型化が追求され、また小規模農業に特化した製品が多々発売されることが日本の農業の特色をよく表している。調べてみると各農機とも実際には数年早く実用化が始まっているのだが、少し遅れて広告が掲載され始めるのも購入者をターゲットにした広告ならではのであろう。欲を言えば、何故ほとんどの広告に価格が明示されていないのか、農機の開発により余裕のうまれた労働量は具体的にどう活かされたのかといった疑問を追究したかった。